令和五年度別府市小・中学生「人権作文」入賞作品

佳作

「サッカーを通じて伝えたいこと」

別府市立青山中学校一年　中嶌　大喜

ぼくは、「黒人」や「アジア人」という言葉を聞くたびに、少し嫌な気持ちになる。ヨーロッパで日本人や韓国人がプレーしていると「アジア人」として差別されるという話を聞いたことがある。どんなに良いプレーをする選手でも、初めは仲間外れにされて、パスをもらえなかったりすることがあるそうだ。サッカーのピッチ上では、一人一人同じプレーヤーとしてプレーする。「〇〇人」というのは関係ないと思う。大人になるほど、そういう差別が多い気がする。サッカーに限らず、いろんなスポーツにおいて、人種なんて関係ないし、言葉がもし通じなかったとしても、一緒にプレーすることによって話さなくてもおたがいのことを分かり合えると思う。

日本は島国だから、大陸のように色んな国の人たちが大勢住んでいるわけではないので、ぼくたちが違う国の人たちとのコミュニケーションに慣れていないというところはある。幸い、南立石小学校、青山中学校には何人か他の国の友達が在籍していたり、ＡＰＵの学生との交流が盛んなので、いろんな国の文化や考え方が知れるのは、とてもうれしい。

子ども同士はすぐに打ちとけて、一人一人の人間同士として対等な関係を築くように思う。ぼくは去年、バルサキャンプという、埼玉で行われたサッ

カーキャンプに参加した。日本全国から集まってきた小一から中一の子どもたちと三泊四日、スペインのバルセロナのサッカーを学ぶというキャンプだ。もちろんおたがい初対面だし、歳も違う、出身地も違う。ぼくが参加した埼玉キャンプは、埼玉在住の子が多く、九州から参加したのは、ぼくを含めて数人だけだった。

始めはきんちょうして、あまりしゃべりかけたりできなかったが、サッカーをしたら、あっという間に仲良くなり、朝から始まり、昼ごろにはみんな一緒に笑い合う関係になった。大分は方言があるけど、バカにしたりする子もいなくて、むしろ大分はどんな所？その方言どういう意味？など、興味を持ってくれた。もちろん同じ日本人だから、差別されることはないのかもしれないけど、もしこれが、いろんな国の子たちが集まるキャンプだったとしても、みんな同じ一人の人間として、一緒に笑い合える関係にきっとなれると思った。一人一人違うところがあるからいろんな考え方を知ることができ、みんなで仲良くなれる。ぼくは、身をもってそのことを体感した気がした。

みんな一人一人違う、なぜならみんなそれぞれに違う力を持っているからだと思う。良い所も悪い所もそれぞれにある。おたがいの意見を聞き合い、助け合うと、より絆が深まり、それこそが平等で平和な社会の礎となるのだと思う。ぼくはサッカーを通じて、人種や国に関係なく、一人の人間同士として対等な関係を築き、みんなと仲良くしていきたい。それは小さなことかもしれないけれど、その輪を大きくしていくことによって、平和で差別のない、みんなが幸せで笑顔で暮らせる社会につながっていくと、ぼくは信じている。